

学 位 論 文 題 名

Byron's Politics and Heroism:  
Wellington, Napoleon and Don Juan

（バイロンのポリティックスとヒロイズム  
—ウェリントン、ナポレオン、ドン・ジュアン—）

学位論文内容の要旨

<第1章> バイロンは『ドン・ジュアン』の中で、当時の国民的英雄ウェリントン卿を激しく批判している。これについて、バイロンのウェリントン批判は、私的感情論で説明されることが多いが、十分な根拠があるとはいいがたい。バイロンのウェリントン批判は、弱者・貧者に対する、バイロンの生得的な感受性が、戦時下にあって国民が苦しんでいるにもかかわらず、王や貴族の贅沢さ、ウェリントンへの報酬の額、戦利を祝っての華々しい行事などを許せなかったところから出たものである。しかしまた、バイロンだけでなく、多くの批評家に、ワーテルローの勝利は、「幸運のせい」と言われたウェリントンの真実の姿を探ると、バイロンが非難したのは、まったく違う、人物像が浮かびあがる。長い年月、軍人として、自己の義務を果たし、命がけの過酷な任務の後に手にした恩賞であること、そしてウェリントンの性格を知る時、バイロンが攻撃すべきは、ウェリントン個人よりも、貴族階級そのものであったと言える。

バイロンのウェリントン批判が私的感情ではなく、政治的なものであるとする時、バイロンの政治的立場を詳しく知る必要がある。バイロンの政治性に関しては、極端に対立する二つの意見がある。ひとつは、バイロンは結局貴族であり、民衆の味方というのは、ポーズにすぎないとする Kelsall の見解。バイロンは貴族であり、「私は生まれながらに反体制者だ」と言ったのは、民衆の側に立った、権力に対する反体制ではなく、ウィッグ党員として、トーリー党に対する反体制であり、イタリアのカルボナリ党との政治活動、ギリシャ独立戦争の参加などは、後世が意義付けをしたもので、バイロンは政治的には、何も成し得ていないと、Kelsall は言い切る。本論は、この Kelsall の意見に反論を試みるものである。バイロンは、貴族の称号を持っていたが、実際は、経済的にも肉体的にも、虐げられた者に属していた。弱者・貧者への同情、その痛みに対する敏感さこそ、生まれながらの性格と、名ばかりの貴族であった貧しい日々とによってはぐくまれた、バイロンの真実の性格である。本論は、Kelsall に鋭く反論した Michael Foot と同様、バイロンが弱者の味方であったという立場をとる。

<第2章> バイロンは、ナポレオンの熱烈な支持者とされ、その容貌も、性格も非常に似ており、最近の研究でも、バイロン自身が、自己の文学に、ナポレオンのオーラを模倣し、その影響を最大限利用したと言われる。しかし、実際には、ナポレオンが活躍してい

た頃の、数年にわたる、バイロンの書簡や日記には、ナポレオンに対する深い思い入れは何もなく、両者の性格も全く異なっている。バイロンが属した頃のウィッグ党の実態も、ナポレオン支持という従来の見解は正確ではない。

バイロンが、ナポレオンに関して、作品でとりあげたり書簡や日記で語ったりするのは、ナポレオンの失墜後である。英雄として潔く死ななかつたことへの憤りの他に、怒り、侮蔑、同情、哀れみ、愛など、様々な感情が交錯する。バイロンの生得的な性格、滅びゆく者への憐憫など、無意識な感情的側面や少年の日の憧れなどが絡み合い、心情的には、徹底的にナポレオンを否定する立場になってはいないが、従来の、バイロンの、ナポレオン同一自我視的解釈や、絶対崇拜は、根拠が薄い。

<第3章> バイロンは、当時のイギリス社会批判のため、真実の英雄像を描こうとする。ウェリントンも、ナポレオンも、真の英雄ではない。真の英雄に必要なものは弱者の痛みを思いやる繊細さと、自己犠牲の精神だとし、新しい形の英雄、ジュアンを作り出す。ジュアンは徹底的に受身である。それまでのバイロニック・ヒーローが、強い自我で、抑圧と戦うのに反して、ジュアンは、運命に流されていくに過ぎない。最後にはギロチンで絶命するという予定であった。ジュアンが、繊細で、やさしく、徹底的に受身であればあるほど、支配階級の残酷さ、社会の矛盾が浮かび上がるという、バイロンの意図である。

身体的不自由さ、経済的、精神的に、バイロンは実際には、被抑圧者に属し、それゆえ、抑圧者への怒りも強く、被抑圧者に対しては真実、同情的であった。Kelsall に反論した Michael Foot は、バイロンの政治的立場は、弱者への同情にあったと主張するが、本論は、この見解の正しさを確認する。さらに、民衆の味方であるとされた Radicals 達、とくに農民出身の Cobbett をバイロンが嫌ったことから、バイロンは民衆の味方などではなかったと言われてきた。しかし、Cobbett は、反フランス派であり、トーリー党政府やピットと親交があった。当時、フランス革命や、ナポレオンは、民衆の味方という見解が一般的だったので、トーリー党と親交があり、反フランス派である者が民衆の立場というのは、矛盾するであろう。

バイロンの政治的見解には一貫性がなく、ある時は、イギリスの議会政治が最高であるといい、ある時は、共和制を支持し、ある時は、全ての政府を否定し、果ては、民主主義は、ごろつきどもの貴族政治だと言う。バイロンの、政治に対する苛立ちは、政治家として活躍できなかったバイロン個人の苛立ちと解されてきたが、真に、民衆にとって理想的な政治形態というものがみつからないがゆえの苛立ちであったというべきである。一見、良さそうに見える政治形態も、民衆にとっては何の変わりもないと、看破する。

バイロンの属したウィッグ党は、「フランス革命支持＝ナポレオン支持＝民衆の味方」であったという通説も正確ではなく、実際には、貴族の立場そのものであり、バイロンは、やがて、ウィッグ党内の矛盾に気づき、また、貴族側でも、バイロンの過激性が、危険なものと思い始める。ウィッグ党内部でも、世代間の、政治的見解相違、主導権争い、親交のあった摂政の背信による政権獲得への絶望など、多くの問題を抱えていたのが、実情である。バイロンが出入りしていた、ホランド卿の Holland House は政治的権力の中心でもあった。人気の中心であったバイロンが、その社交界を追われたのは、スキャンダルが原因であったと、従来の伝記は説明するが、実際には、バイロンはその政治的過激さ、民衆寄りの立場により、疎外されたと言える。

<結論> バイロンは、実際には、被抑圧者に属していたので、弱者に対する、思い入れは真実であり、その政治性も、その英雄観も、完全に民衆の立場に立ったものであった。

確かに野望を抱く野心家ではあったが、不名誉なことを嫌い、未熟と言われようとも、理想の政治の追求や、民衆のための戦いを放棄できなかった。被抑圧者に対する繊細な感受性、政治や社会の矛盾を前にしてもあきらめたり妥協したりしない態度、そこにバイロンの政治意識の中心点がある。

# 学位論文審査の要旨

主 査 教 授 長 尾 輝 彦  
副 査 助 教 授 高 橋 英 光  
副 査 助 教 授 瀬 名 波 栄 潤

学 位 論 文 題 名

## Byron's Politics and Heroism: Wellington, Napoleon and Don Juan

(バイロンのポリティックスとヒロイズム  
—ウェリントン、ナポレオン、ドン・ジュアン)

本論文は、バイロンの政治的スタンスをめぐる真っ向から対立した Malcolm Kelsall と Michael Foot の論争を出発点にして、バイロンの政治意識の再検討を行い、作品研究、伝記研究、歴史研究の三つの視点を総合することによって、従来の、ややもすると不正確、曖昧、単純なものになりがちであった、バイロン伝説に修正を加え、より正確な歴史的事実の復元をめざそうとしたものである。バイロンの生涯と作品、ウェリントン卿とナポレオンの伝記、摂政政治（リージェンシー）時代のイギリスの政界の状況等を詳細に検討して、慎重に結論を引き出そうとしている。バイロンの政治的スタンスは、単なる素人のショーマンシップにすぎなかったと断言した Kelsall のバイロン批判に対して、Michael Foot ははげしい口調で反論しているが、本論文は、もう少し冷静に、Kelsall の議論に、事実と史実に基づいて一つずつ批判的に検証しようとしたものである。この目的にそって、本論文は、バイロンの死とともに未完で残された長編『ドン・ジュアン』に取り組んでいる。叙事詩的な規模を持つこの長編詩は、ドン・ジュアンの物語をたどりながら、それと平行して、詩人自らの思索や人生観がエッセー風に語られているが、そこにたびたび言及されるナポレオンとウェリントン卿という二人の英雄の生涯と当時の歴史的状況を考察し、さらには、バイロンが政界入りした当時の若いウィッグ党の政治家メルボーン卿とオールトロップ卿の政治活動を検証して、正しい歴史的理解を達成しようとしている。

バイロンは、言うまでもなく、19世紀初頭、英国のみならずヨーロッパ大陸に名をはせた詩人である。その後ヴィクトリア朝時代に、ゲーテなどと対比されて極端な評価の下落がおこった。この結果、バイロンには賛否両論のさまざまな伝説が生み出された。長い間、「貴族」、「放蕩者」、「情熱の詩人」といったレッテルが貼られてきた。バイロンを真剣に再評価しようとする動きは20世紀の後半になってからであるが、その状況の中で、バイロンの政治的スタンスをめぐる Malcolm Kelsall と Michael Foot の論争は、さながら、バイロン批評史の縮図を見るような観がある。本論文は、この二人の論争を出発点として、作品論から、伝記研究、歴史研究へと視点を広げている。「ウェリントン卿とバイ

ロン」(第1章)、「ナポレオンとバイロン」(第2章)という、『英雄列伝』を想起させるような議論のスタイルには、興味をそそるものがあり、また、バイロンの属したウィッグ党の実態を、若い二人のウィッグ党の政治家に焦点をあてて明らかにしようとしたところには特に見るべきものがある。伝記的研究に傾くあまり、作品そのものから離れてしまう傾向があるが、バイロン研究に一石を投じたものであることは疑いない。執筆者は、国際学会「バイロン協会」ですでにこれらの成果の一部を発表し、注目を集めている。

審査委員会の審査は、まず、作品研究と伝記研究と歴史研究とを同一の視野におさめた、そのスケールの大きさを評価した。取り上げた同時代の人物は、ナポレオンやウェリントンを始めとして、十数人に及んでいる。次に先行研究が少ないという点も評価した。バイロンは熱狂的な崇拜の対象になったり、あるいは逆に、偶像破壊的な批判の対象になったりしたが、本論文のように、通説を批判し、あくまで事実の忠実に再評価したという論文は少ない。さらに、執筆者が、すでに、世界各地で開催される国際学会「バイロン協会」の大会に積極的に参加して、世界のバイロン研究者と交流を行っている点も、評価した。

審査担当者は、学位申請者に対する口述試験を含め、前後6回に及ぶ審査委員会をもち、入念な審査を重ねた。口述試験に臨んだ学位申請者の受け答えは、博識に支えられ、自信に満ちた堂々としたものであった。これらの審査の末に、審査担当者は、本論文が、長年にわたる研鑽と熟慮の成果を、壮大なスケールで展開したものであり、学位授与の基準を十分満たす研究成果であるという点で、意見の一致を見て、その旨の審査報告を教授会に對して行った。